

## なぜ悲劇で悲しむべきなのか

### —— フィクション鑑賞における感情的反応の適切さについて

東京大学 岡田 進之介

小説、映画、演劇などのフィクション作品の多くは特定の感情的反応を鑑賞者に喚起させる。例えばホラー映画は鑑賞者に恐怖を、サスペンスドラマは視聴者にサスペンスを感じさせることが多い。さらに言えばそのような私たちのフィクション作品の鑑賞実践において、作品(や場面)に対して特定の感情を持つことは適切であり、他の感情を持つことは不適切だと言える。例えばホラー映画で主人公の後ろから人影が迫っているときにユーモアを感じて笑ったり、逆に喜劇で登場人物が可笑しいことをしたときに悲しくて泣いたりするのは、不適切な反応とされるだろう。しかしそれはなぜなのか。そのようなフィクション鑑賞における感情的反応の適切さの基準が何であるかに関して、英語圏の現代美学においていくつかの主張が為されてきた(Currie 1990, 2020; Gilmore 2020)。

まず Currie (1990) は作品に対する感情的反応が適切なのは、その反応がその作品の虚構的作者のそれと調和する [congruent] ときであると述べる。つまり『アンナ・カレーニナ』においてアンナの死を憐れむべきなのは、それを語る虚構的作者がそれを憐れんでいるからだというのだ。これを本発表では調和説と呼ぶ。一方で Currie (2020) は作品に対する適切な感情的反応とは作者によって「意図された反応 [intended response]」であると主張する。これを意図説と呼ぶ。さらに Gilmore (2020) は、作品が表象する特定の対象に対するある感情を喚起するようにデザインされ、またそのデザインによってそうすることに成功するとき、その喚起された感情が適切だと述べる。この主張をデザイン説と呼ぶ。

本発表では調和説と意図説を批判してデザイン説を擁護するが、一方で Gilmore (2020) の主張にも改良の余地があることを指摘する。発表の構成は以下の通りである。第1節では調和説を検討する。調和説にはそもそも「虚構的作者」が何であるかが明確でないという問題がある。それを作品の語り手と解釈しても、作品から読み取られる仮想的作者と解釈しても、感情的反応の適切さの基準として不十分である。第2節では意図説を検討する。意図説に関しては作者がある感情を喚起することを意図していても、作品が適切な内在的特徴を提示しなければその感情的反応は不適切であるという点から批判する。第3節では Gilmore (2020) のデザイン説を検討する。デザイン説は作者の意図だけでなく、作品の内在的な特徴をも感情の適切さの基準に含んでいる点で意図説よりも優れている。しかし Gilmore (2020) は、フィクションでは現実とは異なり内在的特徴によって作者が適切な感情を恣意的に指定できると主張するが、それはもっともらしくない。そこで私はデザイン説の依拠すべき作品の内在的な特徴が何であるかを、感情の対象の基準的 [criterial] 性質の点から再検討する。